CROSS

NBU総合インタビューマガジン

N-SPO
プロ野球での活躍誓う!

N-CUL
目指せ!CMディレクター

Professor's ROOM
工学部の魅力を語る!

N女がゆく
初めてのフレンチ専門店

NBU COLORS

特集

2017 最優秀研究室

航空宇宙工学科 岡崎研究室

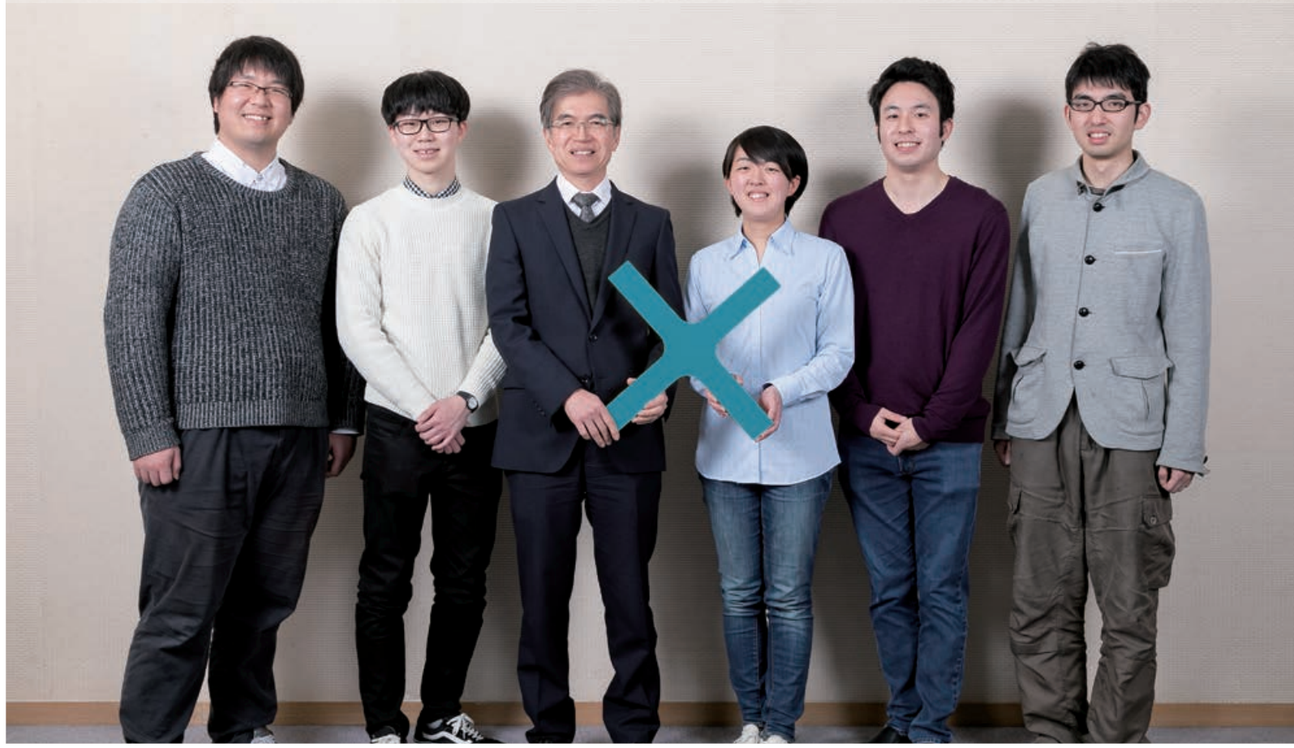
20

2018
MARCH

SPECIAL CROSS TALK

2017 最優秀研究室「航空宇宙工学科・岡崎研究室」

2017年度の卒業研究論文合同発表会で、最優秀研究室に輝いた航空宇宙工学科「岡崎研究室」。
それぞれに個性とこだわりを持つメンバーが、岡崎覚万教授のもとで、ひとつになり、
「トンボロボットの飛行速度域の拡張に関する研究」に取り組みました。
その軌跡と、今だから話せるとっておきのエピソードを思い出深い研究室で語り合いました。



得意分野を持つ5人 互いの魅力を語る。

岡崎　みんな最優秀研究室の受賞、おめでとう。研究内容はもちろんだけど、当日のプレゼンテーションも素晴らしかったよ。自分たちがやってきたことを第三者が正しく理解する説明ができた結果だと思うよ。

村上　先生には発表内容について本当に細かい部分までアドバイスをいただきました。個人的にはソフトウェアで例えるなら、当初はバージョン0．1から始まったのが、検討・修正を重ねることで、1．7までアップデートできたと思います。夜遅くまでメンバーで話し合いをしたこともあったので、これは最優秀賞を取らないと割が合わないと思いましたね(笑)。

岡崎　初めてみんなのプレゼンを聞いたときは完全にダメだと思ったよ(笑)。でも、カッコいいものはなくて、「伝わるプレゼンとは?」を自分たちで考え、意見交換することで、どの研究室にも負けないクオリティに仕上げたね。

中山　今日は祝勝会のようなものだから、お互いの健闘を讃え合いましょう。プレゼンでも活躍した村上くんは、場の空気を温かくしてくれる貴重な存在。やっぱりみんな研究に没頭していると、メンバー間の空気が「ピリピリ」としている時もある。でも、村上くんがいつも突拍子もないことを言って、緊張をほぐしてくれた(笑)。

大畠　技術面でいうと、やっぱりトンボロボットの操縦者として大活躍したよね。実は僕も最初の頃は操縦していたけど、どうやら君の方がセンスがあったみたい。ちょっと悔しかったから、ずっと「君の操縦が上手くないと研究は台無しだ」とプレッシャーをかけ続けたけどね(笑)。

岡崎　操縦者としての腕前はなかなかだよ!メンバーがコツコツと積み上げてきた検証結果をしっかりと現実のものにするためにプレッシャーもあっただろうけど、よく頑張りました。今回は、それぞれに個性と得意分野を持つ5人が集まり、ひとつの研究に対して力を合わせることで最高の研究成果を残したと思います。

椎原　大畠くんと中山くんとはカンサットプロジェクトで、全国優勝を勝ち取るために一緒に戦ってきたメンバー。2人とも機体の解析を担当していたのですが、いつも、冷静で粘り強くデータなどをまとめる姿を見ていたので、トンボロボットもまずは2人の判断に耳を傾けようと思った。

森　僕自身は、普通科高校出身だし、ものづくりに関わった経験もなかったので、どうしても工業系の知識については後れを取っているという感じだったので、いろんな場面で本当に助けられたよ。

中山　カンサットのチーム内でいちばん重要視していたのは、打ち合わせ。だからカンサットのメンバーには「ひとつ話せば、10伝わる」信頼感を持っています。上手くいったことも、失敗したことも、経験を積み重ねてきた強みはありましたね。

大畠　確かにカンサットでやってきたこと、そこで生まれたコミュニケーションが、今回の研究にも活かせているという実感はありましたね。試験の手順やメンバー間の作業分担など、迷うことは少なかったよね。次はこういう準備が必要だというのは言われなくても分かっていた。

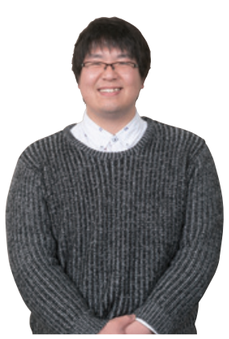
椎原　カンサットを通じて、責任を持つことを学んだので、自分の役割が何かを常に考えることはできました。私は研究室の中では紅一点ですが、男子メンバーを見ていると、分からないことを尋ね合ったり、お互いに刺激を与え合っているのが分かったから、なんだか微笑ましかった。

岡崎　今回のトンボロボットとカンサットは、まったく別のもの。でも、モノをゼロか

岡崎研究室 Member Profile

工学部 航空宇宙工学科4年
中山 大輔（Daisuke Nakayama）
（大分県/県立日田高校出身）
就職先　ヤンマー建機 株式会社

「小型衛星カンサットプロジェクト」でリーダーを務めた実績を持つ、メンバーのまとめ役。カンサットでの経験や、そこで育んだコミュニケーション能力を研究に活かし、チームの作業を円滑に進めるための道標を示した。



工学部 航空宇宙工学科4年
大畠 将希（Masaki Obatake）
（高知県/県立高知工業高校出身）
就職先　株式会社 技研製作所

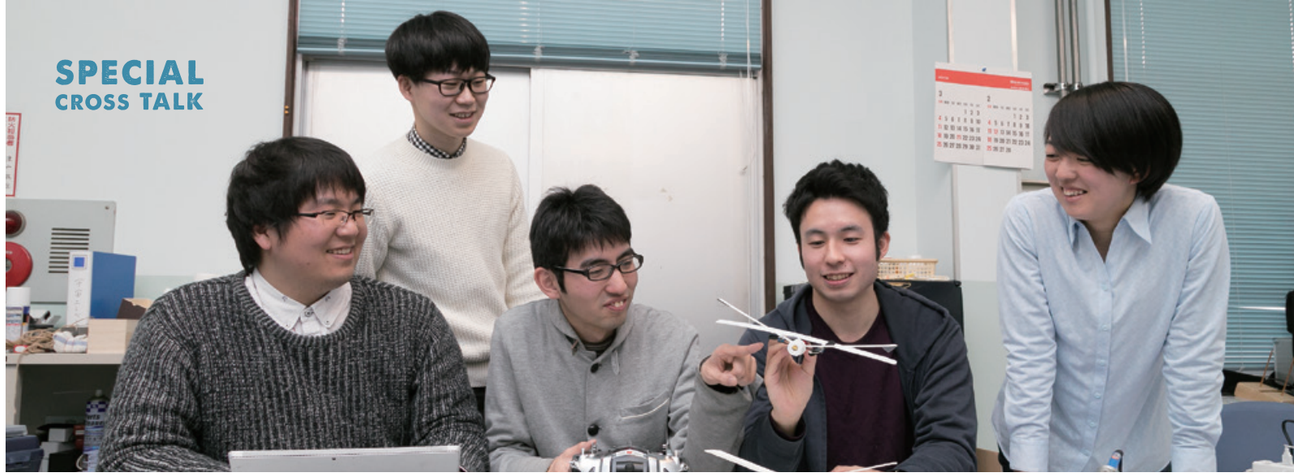
冷静さと粘り強さを併せ持ち、チーム内では機体解析のキーマンとして活躍。研究を通じて「諦めないこと」「妥協しないこと」「先入観を捨て去ること」の大切さを学び、卒業後は一流のエンジニアとなるべく、機械設計の道へ進む。

工学部 航空宇宙工学科4年
村上 聡駿（Satoshi Murakami）
（大分県/県立情報科学高校出身）
就職先　プライムエンジニアリング 株式会社

ユニークな発言で研究室の空気を和ませ、メンバーを笑顔にさせるムードメーカー。コンピューターの扱いに長けており、チームではトンボロボットの操縦を担当。メンバーの検証結果を現実のものにする大役を果たした。

工学部 航空宇宙工学科4年
椎原 遥（Haruka Shiihara）
（大分県/県立鶴崎工業高校出身）
就職先　工業高校教員

ハードウェアの回路設計やはんだ付けなど、技術面で研究を支えるチームの紅一点。研究に取り組む一方で、高校教諭の免許を取得。卒業後は工業高校で教壇に立ち、ものづくりの楽しさを後輩たちに伝えることが目標。



ら開発していくなかで、踏まなければならないステップのパターンは全く同じなんですよ。

大畠　今回のプロジェクトは、機体の軽量化を図るために新しく構造を変えるものでした。でも、全体をバランス良く軽くしないと上手く飛ぶことができない。毎年、色んなところで軽量化を図ってきたけど、今回は本当に大変だったよね。軽量化に関しては、相当、森くんが頑張ってくれて、ありがたかった。

森　胴体の重さに関してすごく悩んでいて…試行錯誤を繰り返しながら、ようやく当初の半分の重さにまでこぎつけることができたんだけど、その時みんなが本当に喜んでくれたことで苦労が報われたよ。それと同時に、自分にはできない技術や思考プロセスに驚くことも多くて。本当にこのメンバーで良かったと何回も思ったよ。

村上　椎原さんの作業技術は凄いよね。エレクトロニクスのハードウェアの回路を作ったり、はんだ付けをしたりとか、よくあんなに細かいことができるなぁと感心する。

椎原　もうちょっと、研究全般に広く関わりを持ちたかったという思いも正直あるけど、とにかく私の得意分野にまずは全力で取り組むことを考えました。他の分野に強いメンバーが4人も居るので、私がサポートできることをいつも考えてたなぁ。でも、みんなも、はんだ付けやってみたらいいのに。できないことはないと思うけど…。

一同　いやいや、細かすぎて絶対できません(笑)。

真のものづくりとは？ そのヒントが研究室にあった。

岡崎　研究室のモットーとして掲げているのは「解析だけでは終わらせない」ということ。解析とものづくりがリンクしていることが大切なんです。

中山　理論に基づいて数式をつくり、その結果が実験できちんと実証されるのかを試す。でも、当初はさまざまな要素を上手く組み込めていなくて、全然見当違いな結果が出ていました。でも、先生からアドバイスをもらったり、メンバーでミーティングを重ねるうちに、…実験値と近い結果を出せるようになりました。

村上　僕は先生から、エンジニアリングへの向き合い方を学びました。「仮説・実験・検証を必ず繰り返すように」は、これからも絶対に忘れることはないと思います。

大畠　やっぱり実験が上手くいかなかった時など、ついつい先生に解決策を求めてしまいそうになる。でも、そこですぐに先生に頼らずに、まずはメンバーで話し合い自分たちなりの答えを見つけるようになってきたのも、個々のレベルアップにつながったんじゃないかな。

中山　基本的にみんな強い気持ちを持ってるよね。何かにつまずいても前を向いて頑張るという姿勢が根底にあるんです。実験で良い結果が出なかったとしても、そこで腐らずに「次はこうしよう！」と切り替えて臨みました。

椎原　それぞれに分担はあるけど、実験になると、どうしても人手もいるし、みんなでお互いをサポートしたよね。「ああでもない、こうでもない」という議論からアイデアがたくさん生まれてきましたね。

岡崎　実験をする時は5人総掛かりですからね。4年生は就活も忙しかっただろうけど、研究室のポリシーとして「就活を言い訳にしない」と掲げているので、みんな研究室でずっと努力してきたよね。

森　研究室で過ごす時間が長かったからこそ、岡崎先生からものづくりに対するヒントをたくさんもらった気がします。自分が答えを導くために必要なことの9割を教えてもらってるかも…。

椎原　でも、それは森くんが先生のアドバイスをしっかり活かせてるから9割だと感じるんじゃないかな。実際、先生は5割のことを教えてくれて、残りの5割は自分で考えて、組み立てていたと思うよ。

大畠　何はともあれ就職も決まって、最優秀研究室というカタチで自分たちの研究が評価されたけど、大学で学んだことを活かすためのスタートラインにようやく立ったという緊張感もあるよね。僕は地元が高知なので、地元に戻って、堤防などを作るための機械設計の会社で頑張る。研究を続けるなかで学んだ諦めないこと、妥協しないこと、そして先入観を捨て去ることの3つを胸にいろんなことにチャレンジしていきたい。

中山　僕は4年間で、感覚ではなく、論理的に物事を考えることができるようになった。それはやっぱり研究室の先生と仲間のおかげだと思います。チームで共同作業することの大切さを忘れずに、自分の強みをしっかりと活かせる仕事をしたいと考えています。

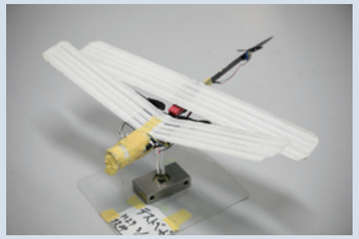
森　卒業研究を通して、苦手分野は努力で埋めることができることを学んだから、エンジニアとして常に成長していく努力を続けていきたいね。

村上　正直、僕はコンピューター関係は強いけど、人との対話はそんなに得意な方でありませんでした。でも、このチームで共同作業をするうちにコミュニケーション能力を高められたと思います。就職先では航空機のエンジンの設計を担当しますが、早くチームの一員となって活躍したいですね。

椎原　私は高校教諭の免許を取得したから、今後は工業高校で教師として働きます。高校生には、ただ作って終わりではなく、解析、検証を繰り返すことの大切さ、ものづくりの面白さを伝えていきたいと思います。

岡崎　ものづくりには必ずステップがある。その階段を一つずつ登っていくことが大事なんです。一人では難しいことでも、仲間と一緒ならクリアできることもたくさんあります。自分のことだけでなく、仲間が取り組んでいること、困っていることを気にすることができるなら、みんな、きっと素晴らしいものづくりのスペシャリストへと成長できるよ！

「トンボロボットの飛行速度域の拡張に関する研究」とは？



平成30年2月26日(月)「平成29年度卒業研究・論文合同発表会」で最優秀賞に輝いた「トンボロボットの飛行速度域拡張に関する研究」。まずはドローンや有翼無人機と比較しながらトンボロボットが「幅広い速度域を飛行できる」ことを説明。そこで岡崎研究室では、さらなる飛行速度域の拡張のため新型機体を製作。機体をシンプルかつ軽量にし、ピッチングモーターを搭載することで、速度域の拡張に成功した。その研究プロセスを飛行動画などを交えて、メンバー全員が説明。「専門的な話なのにとても分かりやすかった」、「災害時の探査機としての可能性を感じる」など審査員から高い評価を受けた。

工学部 航空宇宙工学科 教授
岡崎 覚万（Kakuma Okazaki）

航空宇宙の分野の企業で約25年間、人工衛星の開発に携わる。小惑星探査機「はやぶさ」など、最先端の宇宙開発プロジェクトに関わり日本の宇宙開発を牽引。その経験の中で得た感動を学生たちとともに味わおうと、NBUに着任した2012年4月から宇宙機器や火星航空機、惑星探査ローバーなどの研究・指導を行っている。

工学部 航空宇宙工学科4年
森 太陽（Taiyou Mori）
（大分県/県立大分南高校出身）

就職先　株式会社 宮崎ジャムコ

普通科高校出身ということで、工業系の知識で遅れを取りながらも、メンバーの協力や自身の努力で少しずつ知識・技術を身に着けた。機体の胴体の軽量化に粘り強く取り組み、当初の半分程度の重量に抑えることに成功。

N女がゆく

NBU GIRLS

フレンチ専門店で大人のマナーを学ぶ。

全員　乾杯！

上地　今日は「大人のテーブルマナー」を学ぶために、本格的なフランス料理のお店で初めてのディナー。いつも行っているファミレスや回転寿司のお店とは全然違う雰囲気で、何だか緊張するね。こういうエレガントな場所で食事をする機会はなかなかないから、思わず背筋がピンとしちゃう(笑)。ジュースもワイングラスに注いでくれていて、凄く素敵な雰囲気。大人になった気分だよ。

成松　きちんとしたお店だと聞いていたから、普段あまり着ることがないフォーマルな服を着て、メイクもバッチリ決めて来て正解だった(笑)。以前参加した「N女プログラム」のメイク講座の経験を活かすことができて嬉しいね。

野々下　お店の雰囲気に慣れるまでは、まだ時間がかかりそうだけど(笑)。それにしても、このスープは本当に美味しい。そういえば秘書検定の勉強をする中で「テーブルマナー」も学んだけど、スープを飲む時の「手前から奥にすくって飲む」を思い出した！今後、社会人になって、ビジネスの会食や目上の方と食事する機会が増えることを考えると、フォーマルな場所で実践的にマナーを学んでいく「経験」も必要なのかもしれないね。

伊藤　お店の方が料理や食材について丁寧に説明してくれるのも新鮮！やっぱり「食」って「文化」だと思うから、ひとつひとつの料理に興味を持って、きちんと向き合うことで豊かな人になれると実感したよ。…だけど何だか、まだまだたくさん食べられそうな気がしない？

成松　確かに！(笑)。まだまだ時間はたっぷりあるし、デザートを食べ終えたらいつものファミレスで反省会しよう(笑)。

今回のN女

経営経済学科1年生の４人

経営経済学部 経営経済学科1年
伊藤 光
(大分県/県立杵築高校出身)

経営経済学部 経営経済学科1年
成松 裕子
(大分県/日本文理大学附属高校出身)

経営経済学部 経営経済学科1年
上地 楓
(沖縄県/県立小禄高校出身)

経営経済学部 経営経済学科1年
野々下 優
(大分県/県立佐伯鶴城高校出身)

NBU女子、初めてのフレンチ。

大学は、社会に羽ばたくための最終ゲート。

私が生まれたのは福岡空港の近くで、当時は炭鉱の線路が走っていた場所でした。頭の上を飛行機が飛び、目の前を蒸気機関車が走るという環境。だから、子どもの頃から何となく乗り物が好きだという気持ちはあったかもしれません。九州大学の工学部航空工学科へ進んだのは、未来への可能性を感じたから。当時、航空工学を学べる大学の定員は今より随分少なかったと記憶しています。何となく航空工学の勉強をして、何となく航空関連の職に就くのかな?と、漠然と想像しながらもその一方で「自分のやりたいことをとことん追求したい」と考えていた大学時代はもう40年も前のこと。還暦となる今年はNBUで3年目を迎えます。今、学生たちには「大学は社会に出るまでの最後のゲート。ここでいろんな能力を身に着け、高めてほしい」というメッセージを伝えたいと思っています。

いくつになっても「勉強するトレーニング」を。

「いろんな能力」というのは、工学部なら、数学、力学や英語などの基礎学力。加えて、本学の教育理念にある人間力。そして、何より大切なのは突き詰める力。分からないことにぶつかったら「なぜそうなるのか?」「どうしたらできるのか?」をじっくり考えてほしいのです。さらに、学んだことを卒業後もさらに追い求められるよう「勉強するトレーニング」もしてもらいたいですね。社会に出れば、当然新しい情報や知識が出てきます。それに対応できるような力を備えてほしいのです。私の場合、その原動力となっているのは「分からないことを分からないままにしたくない」というストレートな気持ちかもしれません。今でも分からないことがあれば、考えたり、調べたりしています。

「自分らしさ」を突き詰めよう。

NBUは、教員と学生の結びつきが強く、チームで研究する雰囲気があります。最近は「コミュニケーションを取ることが苦手だ」という若者も多いと聞きますが、そもそも自分に自信を持てば、自ずとコミュニケーションは取れると思うんです。やりたいことを突き詰め、自分が強みとする分野からコミュニケーションは自然と広がっていくでしょう。

まずは、足元にあるひとつのことを深く学んでほしい。失敗を繰り返しながら経験を重ねた結果、時が経つと、スペシャリストでありながらゼネラリストにもなり得るんです。だから、大学はゴールではなく社会へのスタートライン。社会に出てからも学び続ける習慣を身に着けてほしいですね。

工学部 航空宇宙工学科 教授
室園　昌彦

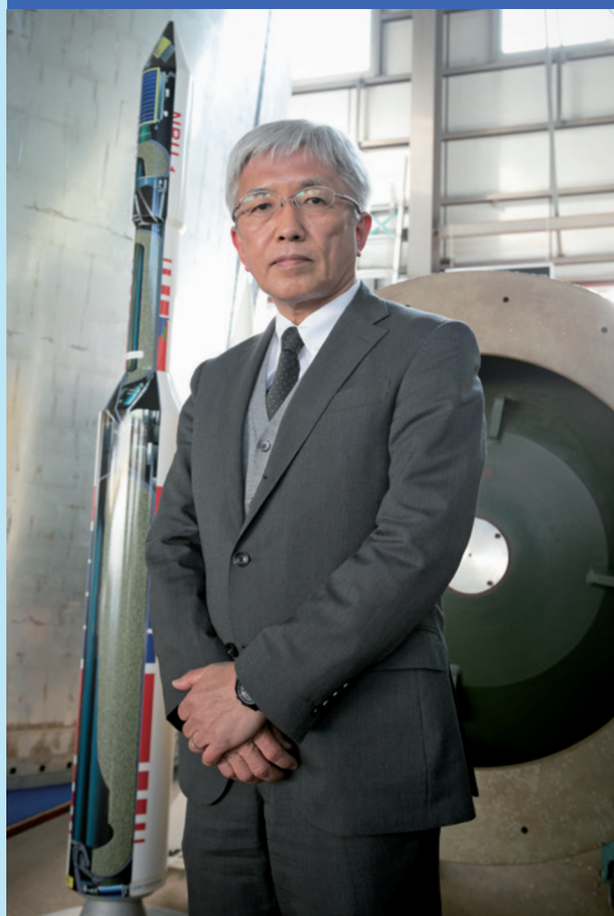
専門分野は構造動力学、振動学、熱弾性学。近年は、国際宇宙ステーションから物資を地球に持ち帰るための研究も行っている。ノーベル生理学・医学賞の大隈良典氏は高校の先輩。大学の教え子には宇宙飛行士・若田光一氏を持つ。

Professor's ROOM

#01

「分からないことを
分からないままにしたくない。
それが、すべての原動力。」

工学部の室園昌彦教授は、宇宙空間における構造物について、学生時代から今日まで長年にわたり研究を続けている。室園教授を突き動かす研究の原動力とは？ そして学生に伝えたいメッセージとは？ 工学のプロフェッショナルの本音とこれまでの歩みに迫る。



今注目のスポーツ選手をご紹介！

V-SPO

Baseball

01

経営経済学部 経営経済学科4年

ケムナ ブラッド 誠

雑草魂で、
ガムシャラに泥臭く
やってきた。

2017年10月26日。NBU硬式野球部のメンバーが、学生食堂でプロ野球ドラフト会議の生中継を見守っていた。そこに響いた「ケムナ ブラッド 誠」という名前。湧き上がる歓喜の声。広島東洋カープから3位指名された瞬間、笑顔を見せた。

意外にも、野球を始めたのは小学6年生の時だというケムナさん。当然、先に始めた仲間とは実力差があり、容易には追いつけない悔しさから「自分に腹が立って…泥まみれになって泣きながらノックを受けていた」という。野球というスポーツ自体は好きだったものの、中学3年でひと区切りがつくと今度はサーフィンに夢中になった。再び野球のグラウンドに戻ったのは日南高校の2年生になってから。この時もまた周囲とのレベルの違いに悩み、プロを目指すどころか将来は通訳の仕事に就きたいと考えていたそうだ。

ケムナさんに転機がおとずれたのは17歳。肩に自信があったことから、サードからピッチャーへのコンバートを志願。「ガッツリ練習した」甲斐あって、キラリと光るピッチャーへと成長していた。

「通訳はいつでもなれるけど、野球は今しか挑戦できないよ」という両親の後押しもあり、ケムナさんはNBUで野球を続けることを選択。2014年に入学した。全国トップクラスの選手ばかりが集まるなか、まずはじっくりと体をつくることから始めた。そして2年生の春、100人以上いるピッチャー陣の中からたった7人しか掴めないレギュラーの座に抜擢されたのだった。球速を伸ばしたり、コーナーワークを磨くこともすべては一日一日の積み重ね。「天才肌じゃないんです。不器用だし下手クソで…雑草魂でガムシャラに泥臭くやってきた感じですね」と自身を分析するように、彼のこれまでの野球人生には、192cm、91kgの恵まれた体格からは想像できない努力の軌跡がうかがえた。

3年生の春には肘頭疲労骨折で1年間の戦線離脱も経験。それさえも「ケガをしたからこそ自分に不足しているものを自覚しました」とプラスに捉えているケムナさん。大学時代に得た宝は「友達との（野球に打ち込める）時間」だと振り返りながら、「ルーティンをつくれ」「（良い意味で）自分が一番だと思え」と教えてくれた中村壽博監督の言葉を胸に、プロの世界での活躍を力強く誓う。そして目標は大きく「開幕一軍。そしてプロの投手にとって最高の栄誉である沢村栄治賞を獲ること」。NBUで学んだ競い合うことの厳しさ、友情、そして努力することの価値。それらすべてがプロ野球選手、ケムナ ブラッド 誠の糧となるだろう。

けむな ぶらっど まこと（宮崎県/県立日南高校出身）／米ハワイ州出身。最速151キロのストレートを軸に変化球を交えた投球が特長。地元の日南市にキャンプ地を置く広島東洋カープは憧れの球団だった。

「感動」を呼ぶ
映像をつくりたい。

工学部 情報メディア学科4年

後藤 和典

Video

N-CUL

次世代のクリエイターはキミだ！

「見てくれた人に喜びや感動を与えられることがいちばん」。映像制作の醍醐味をそんな風に語る後藤和典さん。ある時には学生らしく、またある時には学生らしからぬ鋭い視点でテーマを切り取る彼の映像は大きな注目を集めている。

映像に興味を持ったきっかけは、小学校の卒業式の日、担任の先生から贈られた映像DVD。内容はもとより、先生が苦心しながら手作りしてくれた、その想いとプロセスに心打たれ、人に感動を与える映像というものの虜になったという。高校時代には、文化祭で動画を制作。友人に「写真でスライドショーをつくってほしい」と頼まれれば、喜んで引き受けるほどのめり込んでいった。将来は映像制作の仕事を志したい気持ちもありながら、大学には公務員になることを見据えて入学。しかし、まるで運命の糸のように「映像企画」の授業に心を奪われ、封印していた映像への熱が再び沸々とわきあがってきたのだった。

そんな彼が特に夢中になって取り組んだのが、大分合同新聞の動画ニュース「Gate Ch（ゲートチャンネル）」と大学がコラボレーションした「地域の目、学生の目 NBUビデオ通信」の動画制作。大分県内のさまざまなニュースを3分程度の映像に収め、月1本のペースで伝え続けた。後藤さんが演出を手掛けたニュースのなかで、自身のベストテイクに挙げるのは「西日本B-1グランプリ in 佐伯」の話題。グルメイベントというと「食」に焦点を当てがちだが、彼は「まちおこし」の要素に着目し、食べ物はほとんど映さず大部分を参加者たちのパフォーマンス（地域PR）で構成した。

ほかにも、大分市から依頼を受け「ふるさとCM大賞」に出品する動画制作に2年連続で携わった。また「大分介護男子フォト&動画コンテスト」に応募した映像は、15秒動画部門で見事、最優秀賞を受賞。介護職に就く男性が少ないことから企画されたこのコンテスト。後藤さんは、おばあさんが若い男性職員の頭をポンポンと撫でる優しく自然な瞬間をカメラで捉え、「必要とされているって嬉しい」というシンプルなメッセージを添えた。

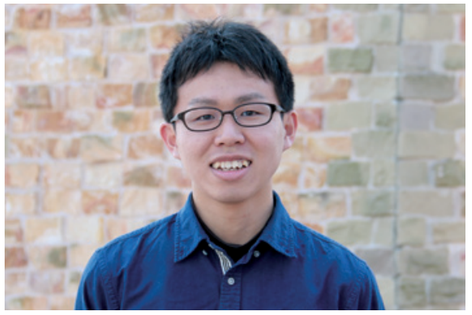
動画の撮影に臨むとき、いつも難しいと感じていたのはコミュニケーションの取り方。しかし、初めは緊張していたインタビューも回を重ねるとコツが掴めてきて、楽しいと思えるようになったという。仲間とのチームワークで取り組むことにもやりがいを感じたそうだ。そして、考えるのはいつも、映像を見てくれる受け手のこと。「どうしたら喜んでもらえるんだろう? 感動してもらえるんだろう?」といつも考えているという。

春からは、インターンシップで訪れた映像制作会社の一員に。「いつかは自分が主体となってCMをつくりたい。それがテレビでオンエアされ、多くの人に伝えられたら本当に嬉しいですね!」

ごとう かずのり（大分県/県立佐伯鶴城高校出身）／佐伯市蒲江出身。NBUでは数々の動画制作に携わった。4月からはおんせん県おおいた「シンフロ」CMなどを手がけた（株）ティーアンドイーに就職。

様々なフィールドで活躍する
NBU 生の「リアル」に密着。
学生が描き出す、色とりどりの世界を
ご紹介します。

NBU COLORS



01

工学部 機械電気工学科4年
西薗 拓也
（大分県/県立大分南高校出身）

父の背中が夢の道標になった。

「働く父の姿に憧れ、自分も父のようになりたいと思っていました」。合格率が一桁だったという難関資格「第3種電気主任技術者」に合格した西薗拓也さん。たゆまぬ努力の末に手にした栄光の背景には、道標となった父の存在があった。西薗さんの父は、電気設備の保守管理を行っているプロフェッショナル。幼い頃から父の働く姿を間近で見つめ、時には手伝いをするなかで「将来は父と同じ仕事がしたい」と思うようになったという。しかし、そのためには「第3種電気主任技術者試験」の資格取得が必要。チャンスは年に一度だけ。大学1年生の頃から合格を目指して受験を続けてきたが、実を結ばない日々が続いた。「資格取得は自分との戦い。モチベーションを保ち続けることが大切」と自分に言い聞かせ努力を重ね、3回目の受験で4科目中3科目に合格。そして、ついに4回目の受験で残り1科目の合格を果たした。資格取得がきっかけで、父と同業種の「九州電気保安協会」への内定も獲得した西薗さんはこう語る。「自分の進むべき道を示してくれた父には、本当に感謝しています」。

【自慢の1カット】
所属する若林研究室では「ベクトル磁気特性制御技術を用いた各種方向性鋼板の低鉄損化に関する研究」を行う。電気に対する飽くなき探究心が、資格取得の大きな後押しになった。

02

工学部 情報メディア学科3年
境 陸人
（大分県/県立大分雄城台高校出身）

総合的な学びで見えた自分の将来像。

夏真っ盛りの8月上旬。夜空に放たれた2万個ものカラフルな風船が「大分七夕まつり」2日目のフィナーレを美しく飾った。大分青年会議所と大学生ボランティアによるこの取り組みで、映像記録・制作のプロデュースを務めた境陸人さんはこう語る。「プロとは違う視点に立ち、大学生ならではの感性を大事にしました」。高校時代は吹奏楽部に所属し、様々な音楽ホールでの演奏を通じて音響工学に興味を惹かれたという境さん。音響のプロになるため入学した情報メディア学科では、音響だけでなく映像制作やプログラミングなどメディアについて総合的に学ぶことで、いつしか興味の対象は「メディア全般の制作・イベントの企画」にまで広がっていった。映像記録・制作の現場では、授業で学んだ知識を活かし、スタッフを束ねるリーダーとして作品を完成へと導いている。「将来は、企画の提案から実現まで、総合的にプロデュースできるようになりたいですね」と語る姿に、未来のクリエイターの息吹を感じた。

【自慢の1カット】
「大分七夕まつり」2日目フィナーレの撮影では、10名以上の映像カメラマンを統括するディレクターとして参加。鮮やかな風船が夜空を彩る様子を収めた動画は、大きな反響を呼んだ。

03

工学部 情報メディア学科3年
高橋 瑞希
（大分県/日本文理大学附属高校出身）

小さな「一歩」が地域の未来を創る。

「お年寄りが積極的に外出するためのきっかけを届けたい」。そう語るのは、福島研究室に所属し、地域が抱える課題を解決するプロジェクトに取り組んでいる高橋瑞希さん。少子高齢化が進む大分市木佐上地区に何度も足を運び、地域住民の声に耳を傾ける中で気付いたのが「高齢者・現役世代が共に地域を支え合うネットワーク」の大切さ。そこでチームメンバーと協力し、高齢者の歩行をサポートする「杖」に安全機能、地域を見守るネットワーク形成機能をプラスした「ウェルステッキ」を仲間とともに考案した。情報メディア学科で学んだデザイン・プログラミングの知識を活かし、開発の主要メンバーとして3Dのモデリングや造形を担当。開発メンバー間で密接に情報交換を行い、デザイン性・実用性を両立しながら、様々な機能を組み込むことに成功した。「全てを機械任せにせず、お年寄りが『自分の足で歩くこと』をいちばんに考えました」と語る高橋さん。ひとりひとりの小さな一歩が、地域全体を支える大きな歩みとなる。

【自慢の1カット】
「ウェルステッキ」の斬新なアイデアは「フューチャードリーム！ロボメカ・デザインコンペ2017」で審査員から高く評価され、佳作及び協賛企業賞を受賞した。

04

経営経済学部 経営経済学科3年
鄭 多彬（チョン ダビン）
（韓国/慶南密陽市出身）

「食」で育む地域と学生の絆。

大分市の東端に位置する港町、佐賀関地区。この地域で、韓国人留学生と中国人留学生が主催する料理教室が行われた。「食を通じて日本の皆さんと触れ合いたいと思い、教室を開催しました」と語るのは、韓国留学生会で副会長を務める鄭多彬（チョン ダビン）さん。韓国、中国、佐賀関、それぞれの場所で親しまれる郷土料理をテーマに掲げ、参加者全員が協力して調理に取り組んだ。「これが韓国流のお雑煮かあ」「中国の餃子は日本のものと似ているね」。言葉の壁を超えた「食」による文化交流が、留学生と地域住民の距離をグッと近づけ、和やかな空気を作り出す。調理が終わると、みんなでテーブルを囲んで「いただきます」。韓国の「タッカルビ」、中国の「トマトの卵炒め」、佐賀関の野菜を使った「かき揚げ」など様々な料理が並び、普段味わえない異国の味に舌鼓を打った。料理教室を振り返って、鄭さんはこう語る。「一方的に提供するのではなく、一緒に作って楽しむことが何よりも大事なんです」。食を通じた異文化交流が、地域と学生の新たな絆を創り出す。

【自慢の1カット】
「NBUチャレンジOITA地域創生活動報告会2018in佐賀関」では地域の方々へ活動の報告を行った。卒業後は、日本でサービス業の仕事に就くことを目指している。

キラリびと

NBUのキャンパス内で「キラリ」と輝くアナタを発見!

経営経済学部 経営経済学科2年

上野 詩寿菜

（福岡県/九州産業大学付属九州高校出身）

「何よりも大切にしているのは、周囲への気配り。どんなに小さなことでも、気づいたらすぐに対応しています」。キュートな笑顔を見せながらそう話してくれたのは、チアリーディング部「BRAVES」のマネージャーを務める上野詩寿菜さん。「BRAVES」のチームメンバーだったお姉さんの影響もあり、実家のある福岡県を離れてNBUへ進学することを決めたという。オフの日には必ずどこかへ出かけ、買い物や食べ歩きを楽しむアクティブ派。「気になるショップに立ち寄って、大好きなラーメンを食べて…それが至福のひとときですね（笑）」。

CROSS

NBU日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL 0120-097-593

大学院 工学研究科 □環境情報学専攻 □航空電子機械工学専攻
工学部 □航空宇宙工学科 □機械電気工学科 □建築学科 □情報メディア学科
経営経済学部 □経営経済学科